第 8 章　対象架橋位置の自然・周辺状況と既設橋梁調査

8-1　ダカール・バマコ間ルートと主要河川との関係

図 8.1 は対象とするダカール・バマコ間ルートと交差する主要河川を示したものであり、図中〇付き番号はそれぞれ架橋計画地を指す。番号と橋梁名称との対比を **表 8.1** に示す。

対象路線サラヤ～キタ間では、ファレメ (FALEME) 川，バフィン (BAFING) 川，バコイ (BAKOYE) 川の国際河川が、それぞれ **図 8.1** の ①，⑥，⑧ の位置で交差している。これら 3 つの河川は、ともにギニア山岳地帯にその源流を位置し、それぞれ合流してセネガル川へと出世する比較的大型な国際河川である (セネガル川水系)。

国家水理局はこの 3 河川に観測ステーションを設置し定期的に水位・流量の観測を行っている。

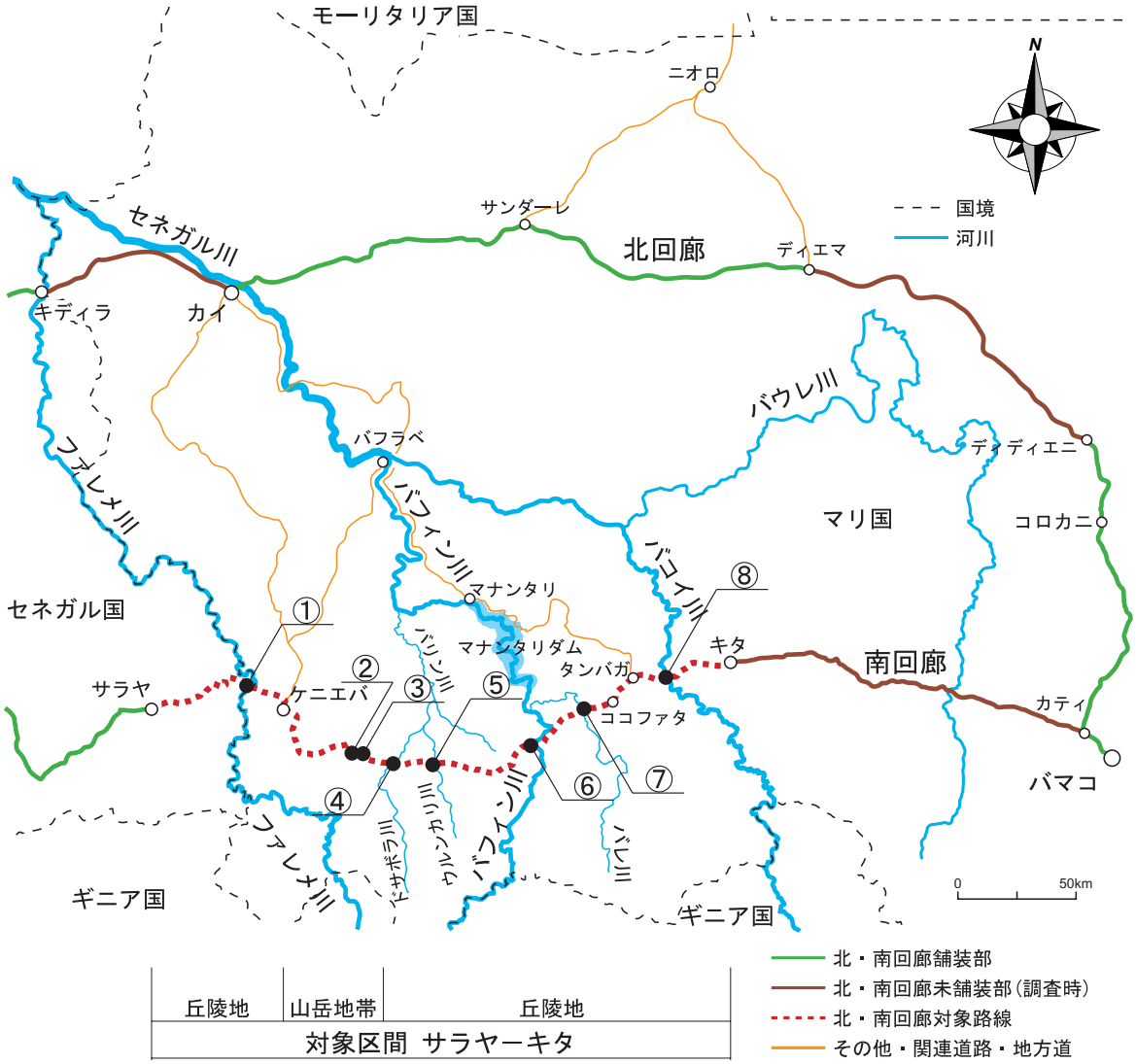


図 8.1　ダカール～バマコ間ルート (マリ国～マリ・セネガル国境) と主要河川

表 8.1　橋梁名称 (仮称)

番号	橋梁名称 (仮称)	交差河川	備考
①	ファレメ川橋	ファレメ川	要請対象
②	コンベラ第１橋	無名 (ファレメ川の支川)	
③	コンベラ第２橋	無名 (ファレメ川の支川)	要請対象
④	ドサボラ川橋	ドサボラ川 (バフィン川の支川)	
⑤	ウルンカリ川橋	ウルンカリ川 (バフィン川の支川)	要請対象
⑥	バフィン川橋	バフィン川	要請対象
⑦	バレ川橋	バレ川	要請対象
⑧	バコイ川橋	バコイ川	要請対象

図中 ④，⑤ の橋が渡河するドサボラ (DOSSABORA) 川，ウルンカリ (OULOUNKALI) 川はともに合流したのち，バリン (BALIN) 川本流へ流入する。それらの源流はマリ・ギニアの国境付近である。バリン川は対象路線よりおよそ 2～3km 北方にその源流があり、対象路線とは交差していない。バリン川は、マナンタリダムの下流でバフィン川に流れ込む。

バレ (BALE) 川はマリ・ギニアの国境付近に源流をもち、マナンタリダムの上流で、バフィン川に合流している。

以上、ドサボラ川，ウルンカリ川，バレ川は、ともにマリ・ギニア国境付近に発するバフィン川の支川であり、ファレメ川，バフィン川，バコイ川などと比較すると小型である。

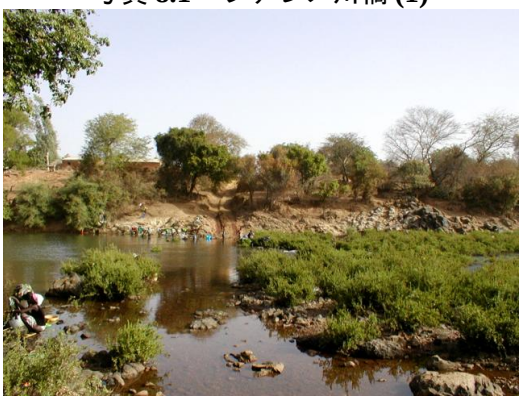
なお、ドサボラ川、ウルンカリ川及びバリン川は、集落によってその呼称が変わることもあり、現地踏査の際は注意を要する。

図中 ②，③ の橋が渡河している河川は、入手した地図などにも明示されていない小規模河川である。地図の等高線などから推定すると、架橋地点から数 km 北方にその源流を持ち、南下した後、FALEME 川に流入しているものと考えられる。

8-2　ファレメ (FALEME) 川橋

橋梁計画対象地の調査時 (乾季) 通水幅は、約 60m～70m 程度であり、水深 60cm 程度の浅瀬 (人工的に岩を設置した) を通過して対岸に渡ることができる (**写真 8.1**，**写真 8.2**)。

写真 8.1　ファレメ川橋 (1)



現浅瀬通過部 (「セ」国を望む)

写真 8.2　ファレメ川橋 (2)

現浅瀬通過部 (「マ」国を望む)

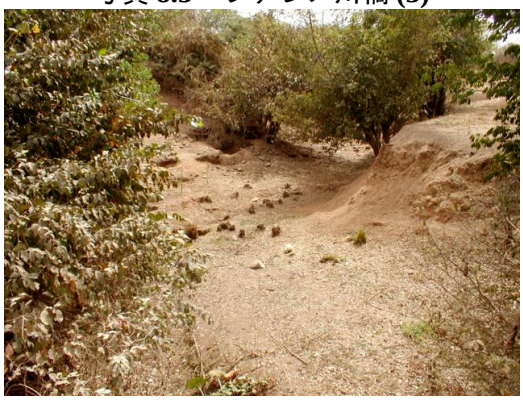
架橋地点から最も近い国家水理局設置のファドゥグー (FADOUGOU) ステーションでは、1964 年に 11m を超える水位記録が残っている。

BID F/S による橋梁計画地は前述のように浅瀬になっていることから、以前より地元住民の渡河地点であった。この見地から、架橋位置は歴史的に意味のあるものである。

しかしながら、渡河地点はファレメ川本流の他、後述のような分岐流[1]と考えられる流路 (**写真 8.3**) を越えなければならず、河川の規模に非して橋長が長くなるというデメリットもあり、近傍により適切な架橋位置があれば、位置を変更することもありうる。

周辺自然状況の観測から、ファレメ川は渡河地点の上流で一度分岐しているものと推測できる。その分岐流は、渡河計画地点より下流 150m 付近で本流と再合流する (**写真 8.4**)。合流後の調査時通水幅は約 70m である (**図 8.2**)。

写真 8.3　ファレメ川橋 (3)



本川とは別の流路

写真 8.4　ファレメ川橋 (4)

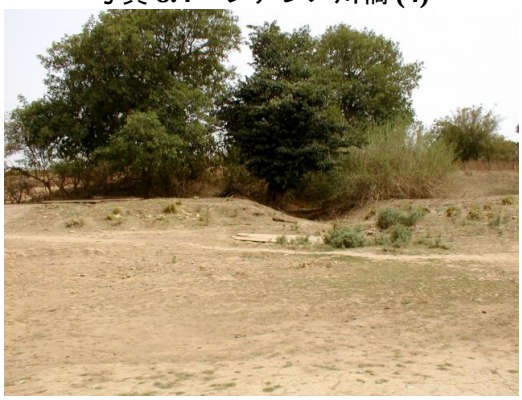


写真 8.3 の流路は 150m 程度下流で本川と合流

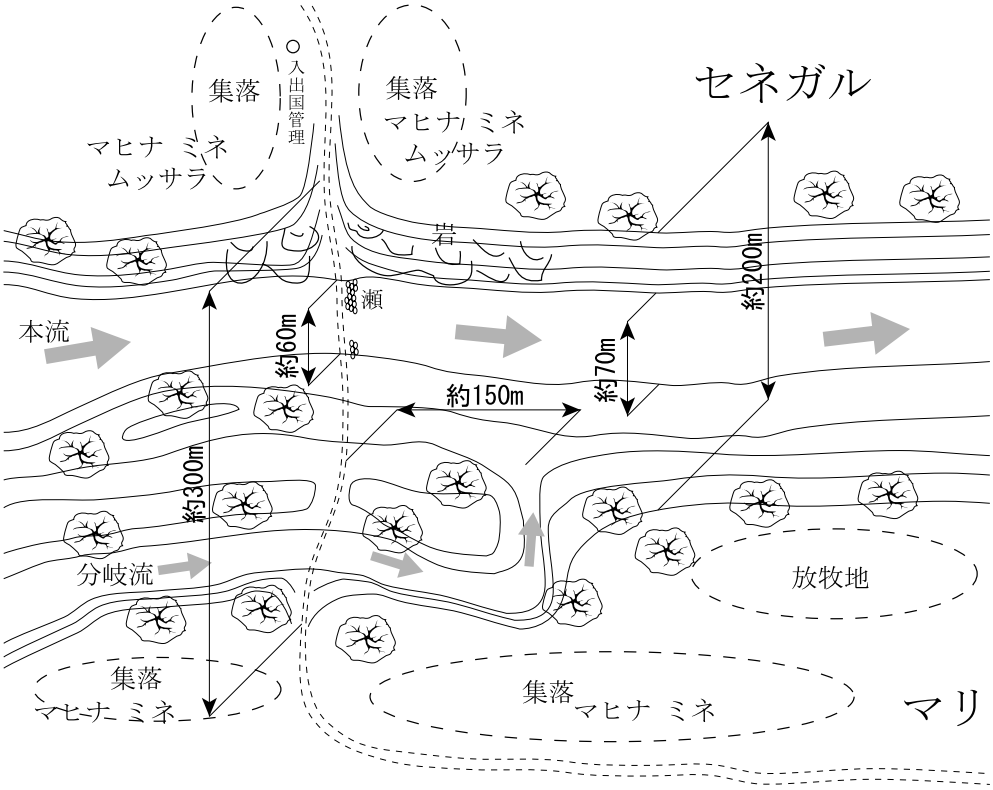


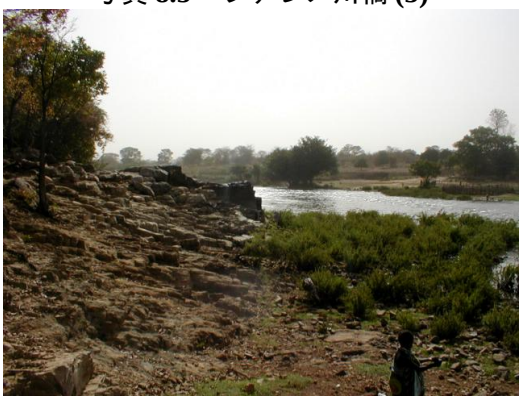
図 8.2　ファレメ川架橋計画地周辺状況

[1]調査団は時間の都合上、この分岐流と思われる流れの上流を踏査できなかった。本報告書では便宜上この流れを分岐流と呼ぶが、単に他からの合流である可能性もある。

「セ」国側河岸には、岩石が露呈しているが、ハンマーでたたくと簡単に剥離するなど比較的脆い (**写真 8.5**, **写真 8.6**)。

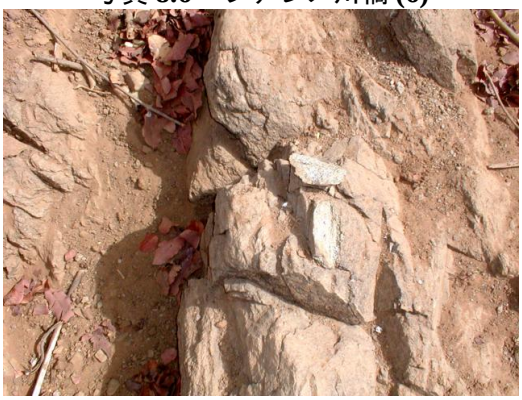
計画地周辺は、「セ」国側にムッサラ・マヒナ・ミネ・(MOUSSALA・MAHINA MINE)、「マ」国側にマヒナ・ミネ (MAHINA MINE) という大きな集落が形成されており、セネガル川を跨いで同じ部族が農業及び酪農により生計している (**写真 8.7**, **写真 8.8**)。

写真 8.5　ファレメ川橋 (5)



左岸に突出する岩石

写真 8.6　ファレメ川橋 (6)



ハンマーでたたくと容易に剥離する

写真 8.7　ファレメ川橋 (7)

「セ」国側集落の様子

写真 8.8　ファレメ川橋 (8)

「マ」国側集落の様子

セネガル側に入出国管理事務所を設けて、国境警察が通行人の管理を行っているが、地元住民に寛容であり、地元住民は自由に往来している (**写真 8.9**, **写真 8.10**)。

マリ国側の集落に学校がないため、マリ国側の児童は、セネガル国内の学校に通っている。しかし、河川増水期には通学も不可能であるという。

道路幅は、道路中心線から左右に 25m、計 50m 幅は用地確保対象とされており[2]、橋梁計画位置近傍では、セネガル国側 5 世帯、マリ国側 5 世帯、計 10 世帯程度が移転対象と推定される[3]。

DNR(マリ国) 及び集落の村長の話では、「橋梁が建設されるならばすぐにでも立ち退く」としているが、現段階では図面などをもとにした現地確認を行っておらず、基本設計調査時に施工計画図をもとに協議し明確にする必要がある。

[2]「セ」国 AATR からの情報

[3] 集落の 1 世帯は、7 人～10 人程度で構成され、直径 3m 程度の土壁でつくった円形小規模住宅を 4～5 軒持つ)